

ベニイトトンボ *Ceriagrion nipponicum* Asahina

【選定理由】

旧市町村単位の絶滅率は66%、
現存数は9.5であり、絶滅危惧
Ⅱ類に相当する。

【形態】

本州原産のイトトンボでは唯
一、♂の全身が朱赤色となる種
であり、和名もそれに由来する。



♂. 長久手町三ヶ峯, 1992年6月20日, 高崎保郎 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張～三河にかけての平野部を中心とした
28市町村(旧市町村単位)で記録されている。

【国内の分布】

本州東北部から九州南部にかけて記録され
ている。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

成熟成虫は、平地から丘陵地にかけての大
規模な改修が行われていない抽水・浮葉植物
の豊富な古い溜池で見られることが多い。未
成熟成虫は、付近の草むらで見られることが多
いが、相当の分散力を示す例もあると推測さ
れる。幼虫は、水生植物につかまっている。
基本的に1年1化と思われる。

【現在の生息状況／減少の要因】

尾張から西三河では、2000年頃は日進市
などわずかな産地しかなかったが、2000年代後半に名古屋市や一宮市(旧尾西市)、稲沢市、瀬戸
市等で新産地が発見された。2010年代になってからも名古屋市、豊田市、豊明市等で新産地が発見
され、その中には以前は生息していなかった池に近年侵入したと考えられる例もある。東三河では
静岡県に近い豊橋市に現存する。

本種は水域の汚染や植生の消失などの環境変化に弱い種と思われていたが、意外に図太く、新産
地へ分散する能力を有していることが明らかになってきた。

【保全上の留意点】

- 1) 幼虫／成虫を捕食する可能性のある外来魚の移入禁止
- 2) 幼虫の生息域となる岸辺の浮葉・抽水植物の確保
- 3) 成虫の休息域となる水域周辺の草地の確保

【特記事項】

今後も新産地が見つかる可能性が高い。とは言え、生息条件である植生があること、本種を捕食
する外来生物がない、または少ないこと、そして近くに本種が生息していること等の条件が揃わ
ないと新産地拡大にはつながりにくい。

(吉田雅澄)

県内分布図

